

始めに心ありき——実心実学の認識論

小川晴久

近現代の実学（技術学、実用の学）は「奇技淫巧」（贅沢）に奉仕する。それでは地球の生態系は守れない。人類は前近代の実心を重んじた実学（実心実学）から急ぎ学ぶ必要がある。十七・八世紀の王夫之（中国）、朴趾源（朝鮮）、三浦梅園（日本）から「廉恥の心を以て民の衣食を裕かにす」るその考え方と士の自覚を学ぶ。

1、問題の所在

この表題では、私が観念論者になったのかと疑われるかもしれない。私は依然として唯物論者である。しかし人間が人間になってから、意識を持つ存在になってからは、始めに心ありきがとても重要であることが、最近、特に今回の考察で

おがわ・はるひさ——東京大学名誉教授、日本東アジア実学研究会会長。専門は東アジア思想史。主な著書に『三浦梅園の世界』（花伝社、一九八九年）、『蘭の発見と自立』（花伝社、一九九六年）、『北朝鮮いまだ存在する強制収容所』（草思社、二〇二二年）などがある。

はつきりわかった。宗教の存在する意味も十分分かるようになった。私は唯物論者になってから、宗教を認めないできた。宗教は神、造物主を前提にするからだ。しかし意識や心を持つ存在がこの世に存在するようになると、意識や心の役割は偉大である。人間が積極的に生きるのも、消極的に生きるのも、能動的に生きるのも、被動的に生きるのも、全てこれによって決まる。人の生きるはパンのみにあらずというキリストの言葉も、心の能動性を表す言葉として、今は真理であると肯定する。唯物論者としてである。宗教は神、造物主を前提とするが、それさえ捨てれば（否認すれば）、そこで説かれていたことは、道徳（心）による人の正しい生き方であり、慰めであり、励ましである。始めに心ありきの世界である。

私が七十二歳にもなつて、唯物論を堅持しながら宗教の意味が分かるようになったのは、東アジア世界の十七・八世紀の実心実学のお蔭である。とりわけ以下に記す内容を通してであつた。実心実学とは近代以前の東アジアの実学を指す。近代以後の実学が実用の学、技術の学であるのに比し、近代以前の实学は、実心を重んじた実学、儒学（修己治人の学）の代名詞としての実学であつた。とりわけ私は西洋コンプレックスから自己を解放するため、西洋に通用する科学的精神の持ち主を発見したかつた。まず三浦梅園（日本、十八世紀）と出会い、次に方以智、王夫之（中国、十七世紀）と出会い、最後に洪大容、朴趾源（朝鮮、十八世紀）と出会つた。十七・八世紀の東アジアの百科全書派たちである。しかし彼らを実心を大事にしていることが段々わかつてきた。彼らは実心を大事にする実心実学者であつたのである。今回発表するのは、彼らの士の自覚とそれに基づく人欲克服の理論、廉恥礼讓の心の要請である。

2、四民の中の士の位置

士農工商は東アジアの封建社会にあつては身分の差を示すものであつて、士は支配身分、農工商は被支配身分であつた。中国では士は士大夫階級（読書人）、朝鮮では両班、日本の徳

川時代では武士階級を示した。しかし十八世紀ともなると士は士農工商の四民の一つという中国古代の規定（管子）「匠君小匠第二十」が甦り、朴趾源の「原士」がそれを示している。

「それ士は下は農工に列し、上は王公を友とす。位を以てすれば則ち無等なり。徳を以てすれば則ち雅事なり」位は無等という規定が鋭い。それは次のように示される。

「故に天子は原士なり。原士は生人の本なり。その爵は則ち天子なり。その身は則ち士なり。故に爵に高下あるも、身は変化するにあらず。位に貴賤あるも、士は転徙するにあらず。故に爵位は士に加はるも、士遷りて爵位たるにあらず」

原士とはその原（内実）は士であるという意である。天子は位であつて、その身、からだ实体は士であるという理解である。

普通天子は士農工商の上に立つ存在とされるのに、その本質は士であるという朴趾源の理解は非凡であり、それだけに彼の士の中身の理解が急がれる。詳しくは次章でそれを見るとして、士は「人を生かす本」（生人之本）とされ、士の仕事は「読書」（学問）であり、その学の内実は「孝悌忠信」であり、「農工賈の理」をも包摂していることを指摘しておこう。

日本の三浦梅園の四民論は天境と人境の両面から見たもの

で、天境から見た四民論に主眼があつた。当時の日本は武家社会で、士たる武士が支配階級（支配身分）であつた。士と農工商の間には「切り捨て御免」が通るほどの差があつた。政治的力關係に基づく尊卑の秩序としての四民關係を三浦梅園は人境的四民として容認した。梅園は現状の政治秩序は一応容認した。人為的側面である。

しかし梅園は士農工商の職業を天地の造化を助ける職分として、その間に尊卑を認めなかつた。天地の造化は万物の生々を維持するものである。人間が社会を形成し、生存を維持してきたが、四民の職は分業であり、役割分担であつて、その各々が天地の造化を助ける大切なものである。人為の世界には身分という価値観・尊卑観が形成されるが、天（自然）の世界にはそれは無意味である。梅園は役割分担の違いだけの四民世界を天境的四民ととらえ、これを人境的四民より遙かに評価した。天境的四民を發見できていない世の識者たちを梅園は痛烈に批判した。

「尊卑の道、人人之を知る。人人己に之を知ると雖も、その天人の分に於ては、世に称えられて識者と称する者、猶ほその分に罔し。その分とは如何。蓋し人境は自ら尊卑を用ひるあり。上尊く下卑し。天境は本より尊卑に意なし。交々その役割を執る。苟も愚にして、思、天境に

及ばず。自ら君位に傲りて、凌虐暴掠し、終にその尊を失す。罔くして、義、人境を明にせず、下職を供せず、怨望悖逆、禍は子孫に延ぶ」
（「玄語」小冊人部、人道）
人境的四民秩序に反抗して子孫に禍を及ぼすことを戒めている点は保守的に見えるが、天境的四民を發見できていない大半の識者や身分秩序の上に安住している為政者批判に主眼がある。

3、士の仕事（役割）

読書（朴趾源の場合）

朴趾源の「原士」という一文で明らかにした士の仕事はあくまでも「読書」であつた。その読書は「志は嬰兒の如く、貌は処子の若く、終年その戸を閉じて読書する」私意のない、また「功利を急」がないものとされたが、何を目的とするかは次のように記された。

「それ読書はまさに何を以て為すや。…講学論道は読書の事なり。孝悌忠信は講学の実なり。礼楽刑政は講学の用なり。読書して実用を知らざるは、講学にあらざるなり。講学を貴ぶ所はその講学のためなり」

講学の实用とされたのは「孝悌忠信」であり、「礼楽刑政」であつた。「孝悌忠信」「礼楽刑政」を見て、封建道徳であり、

封建秩序維持と速断してはならない。「孝悌忠信」の孝悌は親に対する感謝の念であり、目上の者に対する尊敬の念である。忠信は誠(実)である。人間にとつて最も大事なものである。「礼楽」と「刑政」の関係も「論語」の中で論じられた主題であり(「論語」為政篇)、恥の感覚に依拠する「礼楽」が今見直されてよい。人間と関係を律するこのような基本的なものが講学の対象とならず、四端と七情や理と気の関係だけが論議されるのは、実用のない講学(読書)として朴趾源によつて厳しく批判されたのである。

朴趾源の言う士の読書(学問)は四書五経の儒教書のみならず、農工賈の理(学)も含まれていたのが、注目に値する。

「士の学は実に農工賈の理を兼ね包む。而して三者の業は必ず士を待ちて而る後に成る」(『課農小抄』諸家総論)
「臣窃(密)に以為く、後世農工賈の業を失ふは即ち士に実学なきの過ちなり」(同)

朴趾源は農書『課農小抄』を残している。「農家之大全」と自負している体系的なものである。「古者は、農と士は別人にあらず、食と教は二道にあらず」(同、胡麻)という確信の上に著わされた農書である。上記士の学の実践である。

仁義の実現(三浦梅園の場合)

「士の天地の間に於る、仁以て己の宅と為し、義以て己の

道と為す」。これが三浦梅園の士の規定である。仁を己の宅と為し、義を己の道となすのは孟子の規定である(『孟子』離婁上「仁、人之安宅也、義、人之正路也」)。もう一つ士の規定がある。

「貧にして道を楽しみ、富みて礼を好む、遺逸も憾みず、厄窮も憫へざる者、惟だ士のみ之を能くす」

前半は『論語』学而篇の規定、後半の「遺逸不憾、厄窮不憫」は『孟子』公孫丑上篇の規定である。遺逸(遺佚)不憾とは、社会から見捨てられても恨まない。厄(厄)窮不憫とは、困難にぶつかつても憂えない。三浦梅園にとつて士とはこういう人物である。こういう人物だからこそ仁義ある社会を目指すという。

仁義ある社会とは「費を省き冗を除き、奢を抑へ分を制し、賭博を断ち民業に務め、屈を伸し鬱を達し、怨に遠ざかり安に宅し、絶者は接し困者は振ひ、窮者は通じ独者は合し、疾者は養ひ孤者は育て、幼者は慈しみ老者は敬ふ」社会と言う。

絶者接すとは、家の断絶を防ぎ、家をつなぐことであろう。困窮者は救われ、病む者は治療を受け、孤児は育てられ、子供は慈しまれ、老人は敬われる。宮沢賢治の「雨にも負けず風にも負けず」の詩の世界にあるような助け合いの社会である。

このような社会は仁（善）と義（是即正しき）が実現した社会であり、そのために仁を宅とし義を道とする多くの士が奮闘する必要があると言うのである。

梅園の士論で注目すべきは、このような士の生き方を民に求めることはできないという指摘である。

「士の行を以て之を凡庸に責むる者にあらず。……士の能を以て之を天下に求むるは、衆を馭するの道にあらず」

仁義ある社会の条件とされた無駄を省き、奢侈を抑えることは、「奇技淫巧」（贅沢）批判であるが、これを大衆に求めることは困難であると梅園は見た。「貧にして道を楽しみ、富みて礼を好む」士であつて始めて実行できること、このような士が率先して範を示していくことが大事であると梅園は考えたのである。

4、非凡な認識の二例

士の任務が以上で分かつたとして、「一士読書すれば、沢は四海に及び、功は万世に垂る」ようなこと（朴趾源「原士」）が、仁義ある社会の実現（三浦梅園）が、どのようにして可能になるであろうか。それを可能にするには非凡な認識（論）が必要である。十七・八世紀の実心実学から二例紹介

する。

甘食悦色の抑制と「性日新論」（王夫之）

十七世紀の中国の実心実学者王夫之（一六一九〜一六九二）の『思問録内篇』に次のような指摘がある。

「天の人をして食を甘しとし色を悦ばしむは、天の仁なり。天の仁は人の仁にあらざるなり。天は以て人を仁にするあり。人もまた以て天を仁にし万物を仁にするあり。天の仁に恃みてその仁に違ふ。禽獣を去ること遠からず」

人の食欲と性欲を天の仁とした上で、それを抑制することを天の仁をより仁らしくする行為としたのである。王夫之は「人欲は鬼神の糟粕なり。好學、力行、知恥は則ち二氣の良能なり」とも言うように、人間の努力を自然の力以上に評価した。しかし人間の能力を全ての人間が発揮しているわけではない。食欲、性欲に溺れて禽獣に等しい行為に甘んじている者は多いのである。「天の仁に恃みてその仁に違ふ」という「その仁」とは、「人が天を仁とし、万物を仁とする」人間の仁行為のことである。天を仁にするとは、食欲、性欲という自然の本能をより人間らしいものにする。自然の仁を人間の仁にすることである。万物を仁にするとは、食糧である万物に愛情を注ぎ、無駄に摂取しないことである。

それが人間の欲望に対し、天下に「公理はあるも、公欲はなし」として、それが野放しになることを戒めた。王夫之は庶民を禽獸と見、その恐ろしさをこう指摘した。

「庶民の禽獸たるは、ただに誅するに勝ふべからざるのみならず、まさにその惡たるを知らざるのみならず、まさに樂しんで得てこれを稱ふ」

〔俟解〕

「庶民は流俗なり。流俗は禽獸なり」

〔同〕

流俗とはこういう者であるという。オルテガの言う「大衆」である。

王夫之が陽明学（王陽明や李卓吾）を糾弾したのは、禽獸と一線を廢してしまつたからである。この一線を崩さないために彼は何を用意したか。「性日新」論即ち「人の生や、神より貴きはなし」論である。紙幅もないし、既に詳細に發表している（¹）ので、それに譲るが、結論を述べれば、神とは「天の美を實現したもの」。「天は美を百物に實現して精と為し、美を人に實現して神となした、〈兩者は〉一のみ」。したがつて百物からも美（精）を吸収し、日々自己の性を新たにしていなければならぬ。一線を踏み外して禽獸に化してはならないのである。

廉恥礼讓の心を養う（王夫之と三浦梅園）

王夫之によれば、「衣食足りて而る後に廉恥興る、財物阜（豊）にして而る後礼樂作る」という考え方は、「末を執りて以てその本を求めらるる」ものであると言う。「末は本の用に資する」ものではあるが、「末を待ちて而る後に本がある」のではないと言う。

末とは物質的なものである。生活必需品としよう。どれだけあつたら人は満足するか歯止めがない。足るを知る心（廉恥の心）や各自が享受できる基準と合意（礼樂の実）が先ず必要である。それがないと、天地の大、山海の富も、人間の限りない欲望を満たすことはできないという。至言である。

「それ廉恥刑られて足るを知らんと欲す。礼樂の実喪はれて阜を知らんと欲す。天地の大、山海の富も、未だ能く人の欲を厭鞠する者あらず」

したがつて次の命題となる。

「先王は以て民の衣食を裕かにするに、必ず廉恥の心を以て之を裕かにす。以て國の財用を調へるに、必ず礼樂の情を以て之を調ふ」

現代人にとって「廉恥」という言葉も「礼樂」という言葉もわかりにくいものになっている。近代以前にはとても重要で意味を持つ言葉であつた。破廉恥という言葉は生きている

が、ここから廉恥をつかむことはできない。廉は清廉潔白という言葉として生きてはいる。廉は欲がないという意である。廉は直(かどがある)、まつすぐという意もあるが、廉価(安い値段)という言葉もあるように、欲張らない意である。廉恥とは欲のない恥を知る態度のことである。礼楽とは礼楽制度のことで、礼とは差があること、差をつけること、楽とは音楽を介して和合すること、一体となることで、家族を含む共同体の秩序のことである。私は人間平等という教育を受け、その感覚を大事にしてきたので、長い間家族道徳にも反発していた。したがって近代以前の身分社会を律した礼楽制度には、嫌悪以外の何物も覚えず、したがって理解の対象とすることはなかった。しかし歳を重ね、平等社会も完全に定着した今、漸く父(母)と子の差、年上の者と年下の者の差、公務(役職)の差などの意味がわかってきて、待遇に差があることも理解できるようになった。平等社会の中での礼制である。礼の本質は差ではなく、譲ることであることも、三浦梅園の礼讓の強調で分かってきた。自発的に譲ることでは差がでる。体力の劣ってきた目上の人には率先してそれを助けるのは人間らしい態度である。楽も助け合いと考えたら、礼楽も近いもの、わかりやすいものになる。平等社会の上での礼楽である。物資や時間や労力が限られたものである時、年

令の差、職責の差の中で、譲りあい、分かち合い、助け合うこと、これは自然になされることである。それが生きている礼楽である。

物資(食糧ほか)が限られている時、皆が生きていくためには、分かち合う精神が必要である。それが廉恥の心であり、礼楽の情であつて、それが「民の衣食を裕かにし」、「国の財用を調へる」ために、先ず必要であるという王夫之の指摘である。

王夫之よりも約一世紀あとの三浦梅園も同じ認識を提示する。

「政は生を厚ふするに在り、生を厚ふするが為に用を利す。…故に民生厚ふして、然して後礼讓廉恥の風唱ふべし。民生厚しといへども、礼讓廉恥の風興らざれば、華奢放恣なれば用足らず。用足らず。用足らざれば又貪る。故に賄略争奪興るなり」

(備原)

「其事乃ち經濟なり。廻ら利用厚生正徳なり。されば利用厚生に何程によき道を得ても、己れ徳を正さざれば、令する所好む所に反すれば、民従はざるの習にて、礼讓廉恥の風おこらず。…此故、三事、利用を初めとし、厚生を本とし、正徳を主とす。徳正しき時人感化す。其指揮水の壑におもむくが如し。何れのことかならざら

ん

(同)

三浦梅園は管仲の「衣食足りて礼節を知る（礼節興る）」が真理であることを十分に認識する。自分の衣食が足りている時は、人の衣食の心配をする余裕ができる。衣食が足りないとき、それを補うため貪る心が起きる。梅園は次のように言う。

「生薄ければ、食らざるを得ず。生厚ければ、貪る心うするぐ。たとへば溺を救ふが如し。自ら水に溺るる時は、子溺るといへども顧ず。自ら舟中に安んずれば、猫犬の溺るるを見て打ち過ぐる人はなし。唯勢の足ると足らざるとのあいだなり」

(備原)

民の衣食が十分足りている時に為政者は礼讓廉恥の風を唱え、その心を養うことの必要を説く。贅沢に流れないために、勤儉節約を説き、譲りあい、助け合いの制度を作るべきだという。梅園は礼楽制度と言っているが、梅園は地元で「慈悲無尽」という共同出資の助け合い組織を作っている。今まで梅園が作った「慈悲無尽」はれだけ切り離されて評価されてきたが、梅園当時の規模は小さいが礼楽制度であることに今回気づいた。礼楽制度が今日わかりにくいものになっているので、これを礼楽制度と理解することはとても重要である。かく理解すれば、中国・朝鮮の郷約も礼楽制度であり、現代

の大小の福祉制度も現代の礼楽制度であることがわかつてくる。梅園の作った「慈悲無尽」興行には「旨趣」と「約束」が付されている。これを年に一度は集会で音読することが、「礼讓廉恥の風」を興すことである。人間教育、社会道德の確認の場である。礼楽の樂の方は夏や秋の祭りがその役割を果たしたのであろう。その上で三浦梅園は上に立つものの道徳とその実践が「礼讓廉恥の風」を興すのに決定的であるという。正徳・利用・厚生 of 三事のうちの正徳である。利用が先で、厚生が本で、正徳が主であるという規定にそれが表れている。

民の厚生が根本で、目的であるが、それをもたらず「主」たるものはあくまでも正徳であるという。実心実学の実心が正徳である。四民の中の士の役割がここにある。士はリーダーとしての範を垂れなければならない。

結語

始めに心ありき。人間が人間として成立して以後は、絶えず始めに自己を律する心、人を思いやる心がなければならぬ。本考察を終えて無性にこの必要を感じる。近現代の実学は本質的に技術の学であり、技術の活用をコントロールする心や精神は内包していない。それは贅沢や無益無用をもたら

す「奇技淫巧」を推し進めるばかりである。それをセーブするものがなければならぬ。実心である。実心とは、自己を律する恥の感覚であり、地球の生命を大切にする心である。上に見てきたような廉恥礼讓の心である。これを豊かに持つていたのは近代以前の実学であり、実心実学の実心がそれである。時代が要求している新しい知は、地球の生態系を守ることのできる知である。私たちはそれを十七・八世紀の東アジアの実心実学者から学ぶことができる。本考察では王夫之、朴趾源、三浦梅園の士の自覚と人欲克服の方法、廉恥礼讓の心を養うことの大切さを学んだ。私は唯物論者であるが、それ故に心を養うことの必要性和大切さを感じる。現在の自分がそれを必要とするし、地球の生態系を守る課題のために何よりも必要である。

注

(1) 拙稿「人間への敵しくも温かい眼差し——王船山の『尚書引義』と『詩広伝』の世界」『日本中国学会報』第五八集所収。

東亞 *East Asia* 2014 4月号

一般財団法人 霞山会

〒107-0052 東京都港区赤坂2-17-47

(財)霞山会 文化事業部

TEL 03-5575-6301 FAX 03-5575-6306

<http://www.kazankai.org/>

一般財団法人霞山会

特集——共存と対抗の均衡めざす日中関係

ON THE RECORD 日中関係の前途— 習近平政権の対外戦略から見る— 天児 慧
 中国に対する国際的連係の実現可能性— 日中の対中外交・安全保障戦略を考える— 神谷 万丈
 中国における日本企業— 回顧と展望 藤原 雅俊

ASIA STREAM

中国の動向 濱本 良 **台湾の動向** 門間 理良 **朝鮮半島の動向** 塚本 壮一

COMPASS 高木誠一郎・岡本 信広・加茂 具樹・坂田 正三

Briefing Room 窮地に追い込まれたインラック首相— 反政府派の攻勢で長引くタイ政治混乱— 伊藤 努

CHINA SCOPE 春節と私 毛 丹青

チャイナ・ラピンス (120) 中共に党員整理の暴風到来か 高橋 博

新連載 習近平体制の経済改革～改革の青写真とその可能性～(1)

新指導部の経済改革と方向性 遊川 和郎

お得な定期購読は富士山マガジンサービスからどうぞ

①PCサイトから <http://fujisan.co.jp/toa> ②携帯電話から <http://223223.jp/m/toa>